

[普及事項]

新技術名：春どり用の晩抽性一本太ネギ新品種「秋田はるっこ」（平成12年～27年）

研究機関名 農業試験場 野菜・花き部 園芸育種・種苗担当
担当者 椿 信一・佐藤友博

[要約]

「秋田はるっこ」は、5～6月に抽だい株率が低く安定しており、春どりで収穫期間が長く、収穫労力の分散が期待される。また、葉鞘が長く、太いため、収量性が高い。葉鞘が軟らかく、一般のネギが硬くなりやすい春どりネギの品質向上が期待できる。

[普及対象範囲]

積雪量が少ない秋田県沿岸部

[ねらい]

ネギ栽培において、5～6月は、ほとんどの品種が“とう立ち”して硬い花茎が生じ、出荷できないため端境期となる。そのため、春どり栽培では抽だいしにくい「元晴晩生」（武蔵野種苗園）や「羽緑一本太」（トーホク）等の晩抽性ネギが導入されているが、「元晴晩生」は分けつすること、「羽緑一本太」は葉鞘部が硬すぎ、晩抽性が不十分で収穫適期が短いことが栽培上の課題となっている。そこで、現地の要望を受け、十分な晩抽性を保持し、軟らかくて分けつしない春どり用の一本太系オリジナル品種の育成を図る。

[技術の内容・特徴]

1. 「秋田はるっこ」は、晩抽性の「長悦」（みかど協和）、および秋田県の伝統野菜で軟らかい「亀の助」を素材として育成した晩抽性系統同士を組み合わせ、一本太ネギ系のF1品種である。F1採種する上で必要な細胞質雄性不稔の形質は、「夏扇2号」（サカタのタネ）から導入している（図1）。
2. 「秋田はるっこ」は、既存の晩抽性ネギ「羽緑一本太」より5～6月の抽だい株率が低く、年次変動も少なく晩抽性が安定している（表1、図2）。そのため、春どり栽培において収穫期間が長く、収穫労力の分散が期待される。
3. 「秋田はるっこ」は、「羽緑一本太」より葉鞘が長く、太いため、全重および調製重が重く、収量性も高い（表1、図3）。
4. 「秋田はるっこ」は、「羽緑一本太」より軟らかく、首部の締まりがやや緩い（表1、図3）。そのため、葉鞘が硬くなって評価が下がる春どりネギの品質向上が期待できる。

[成果の活用上の留意点]

1. 普及予定地域は、露地栽培では積雪量が少ない秋田県沿岸部。
2. 作型は春どり専用で、露地栽培では、5月播種、7月定植、翌年5～6月収穫、ハウス栽培では5～8月播種、7～11月定植、翌年4～7月収穫となる。
3. 夏どりや秋冬どりの作型では、分けつ株が発生しやすいため適さない。
4. 種子は、2017年より県内許諾先から販売される予定。

[具体的なデータ等]

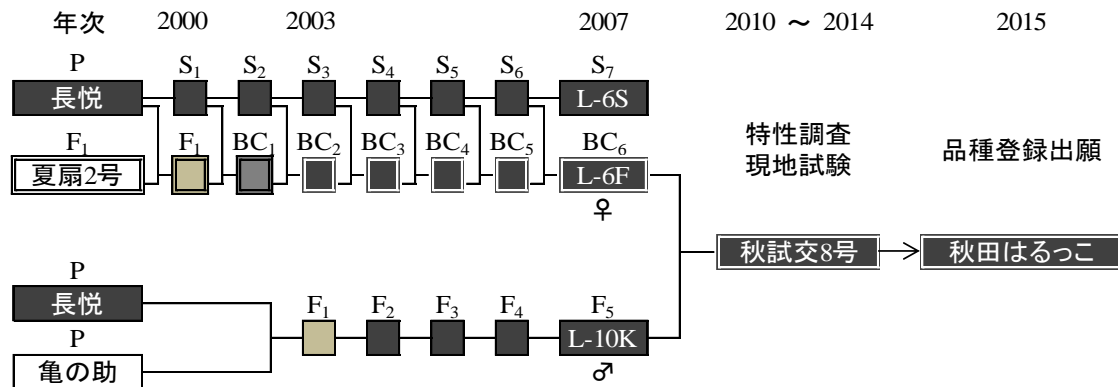


図1 育成経過

二重囲みが雄性不稔系統、黒塗りつぶしが晩抽性系統を示す
親系統のうち「L-6F」は雄性不稔系統、「L-6S」は維持系統

表1 育成地における主要特性 (2013年 秋田市)

品種名	抽だい株率 (%)	分けつ株率 (%)	草丈 (cm)	堅さ	首部の締まり	葉色	葉身長 (cm)	葉身折径 (mm)	全重 (g)	調製重 (g)	葉鞘長 (cm)	葉鞘径 (mm)	総収量 (kg/a)
秋田はるっこ	0.0	0.5	89.7	2.4	2.0	4.4	52.0	41.0	269	218	33.5	24.1	596
羽緑一本太	1.8	0.0	92.7	3.0	3.0	3.0	59.9	33.8	215	191	32.1	21.0	512

ハウス越冬栽培: 128穴セルトレイ使用、播種2012年9月1日、定植2012年11月6日、収穫2013年7月10日 z: 評価基準は、「羽緑一本太」を基準として、堅さ: 柔(1)、やや柔(2)、同程度(3)、やや堅(4)、堅(5)、首部の締まり: 緩(1)、やや緩(2)、同程度(3)、やや締(4)、締(5)、葉色: 柔淡(1)、やや淡(2)、同程度(3)、やや濃(4)、濃(5) y: 収穫後に根切りした後の重量、x: 根切り後、本葉数を3枚に皮むきした後の重量 w: 草丈60cmになるように葉身をカットした後の重量をもとにした換算収量

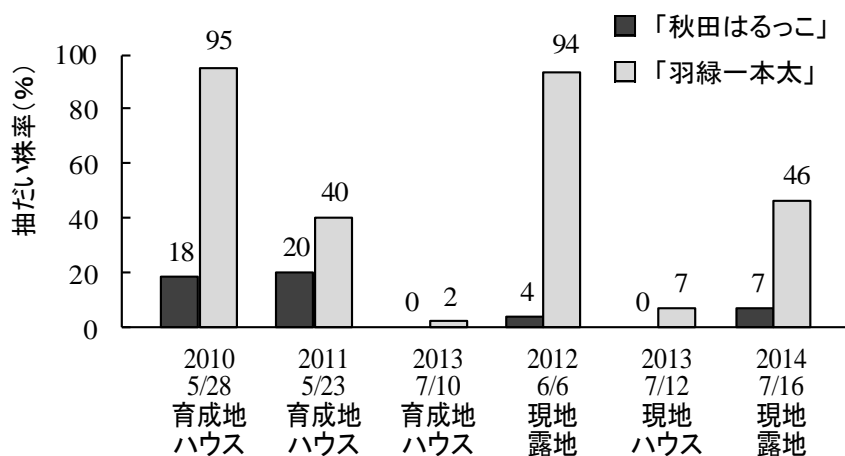


図2 収穫時の品種別抽だい株率

育成地: 秋田市、現地: にかほ市



図3 品種別の植物体

bar=10cm

[発表論文等]

秋田県「秋田はるっこ」品種登録出願 2015年9月4日 (第30440号)